（別紙）

「第１回森林における生物多様性保全の推進方策検討会」における主な意見

平成２０年１２月３日（水曜日）に開催された「第１回森林における生物多様性保全の推進方策検討会」において、委員から以下のような意見が出された。

○　一般の消費者にとって、森林における生物多様性は分かりにくい。森林は都市住民から遠い存在であるので、「生物多様性に配慮したライフスタイルの提案」を具体化し、消費者と生物多様性を結びつけていくことが重要である。

○　水田や里山は、きちんと管理すれば、トンボやカエルが増えたなど結果が見えやすい反面、森林については、奥地天然林や人工林を含め、全体として生物多様性保全とどのような関係にあるのか、一般の人々に十分理解されていない。

○　持続的な林業経営と生物多様性保全を共存させていく上で、シカによる森林被害が大きな問題である。有用樹種を育成しても大径木は樹皮剥ぎに遭い、間伐により下草が生えるようにしても、食べ尽くされて表土流出まで起こっている。

○　以前は日本の里山で普通に見られた渡り鳥が減少しているのは、越冬地である東南アジアにおける森林の破壊が影響しているおそれがあり、実態の解明も含め、森林の保全に対し、国際的な視点で取り組んでいくことが必要である。

○　広葉樹林であっても、手入れが行き届かなくなり下草が消滅するなど荒廃した森林が見られる。過去に人為的な管理によって生態系が維持されてきた森林については、今後とも継続的な管理が必要である。

○　保護林だけの議論ではなく人工林も含めて、生態系、種、遺伝子という異なるスケールで森林の生物多様性に関する理解と整理を進めていく必要がある。何を行えば生物多様性の保全に結びつくのか現場での処方箋が必要である。

○　人類は自然を利用して発展してきたが、生態系サービスを持続的に利用していくため、森林から河川、海への物質や水の循環が生物多様性の保全につながることを考慮し、生態系ネットワークの確保に取り組んでいくことが重要である。

○　「生物多様性の保全に貢献する農林水産業の推進」が国家戦略にも位置づけられているが、生業としての林業と生物多様性の保全を両立するためには、人工林の適正な管理を生物多様性の観点からきちんと位置づけることが重要である。